

# 比較の視野による抒情伝統論

——陳国球『抒情伝統論與中国文学史』について

台北：時報文化出版／2021年7月／480頁／NTD 600元



黄 英哲

陳国球教授が二〇二一年に出版した『抒情傳統論與中国文学史』は、これまでの抒情の伝統についての議論の総括であるとともに、抒情の伝統を再考する始まりとしても、本書の出版は大きな意味を持つている<sup>(1)</sup>。本書は文学史における抒情の伝統についての研究成果であるが、同時に、彼が台湾に移り新たな抒情の視野を展開するための礎石にちがいないと私は考えている。東アジアの政治文化の転換期である現在、抒情の伝統を探究することは貴重なことと思われる。なぜなら、実学実用を重んじる今の時代にあっても、伝統的な抒情はなお存在し、個人の内面の理想の発露を重んじる抒情の伝統に関する議論も続いていることを本書は教えてくれるからである。

陳国球はこの二〇年間に文学史をテーマとする考察と探究で多くの成果をあげてきた<sup>(2)</sup>。中国内地の中国文学研究者とは異なる文学史の視野を展開する、この香港出身の中国文学研究者は、その他の地域に比べてより敏感な「比較」の意識を持つていると言えるだろう。この意識の

もとに彼は中国の抒情の伝統の起源と展開の研究に打ち込んでいる。本書は文学的事項や文学作品のテキストを検討することで抒情の伝統の確立を論じようとするのではなく、抒情の伝統の起源と展開について丁寧に整理し、中国および外国の研究者や文人による中国文学史の論著を検討の中心とすることによって、議論の流れを構築するという新機軸を開いた。

中国近代の知識経験に照らせば、文学史の実際の形式は文学史の教科書として登場するに過ぎないことは、市場における文学史の教科書の乱立からも明らかである。また、文学史という学問の誕生は中国という国民国家の自己認識と関わっているため、民族主義的歴史学の制約と国家イデオロギーの要求から自由ではないられない。しかし、陳国球と王德威が文学史の特定のイデオロギーの立場を検証する中で、過去二〇年間にわたって文学史の抒情の伝統論について検討し、著書で陳世驥、高友工、プルシエク、夏志清、林庚などの学者の論について言及したことは、文学史を実用面から論じる

ことを矯正するのに有効に働き、さらに中国文学史自体の意義を探究する路へと回帰させたと言えるだろう。文学史のイデオロギーが集団的政治アイデンティティを操作し集積させるという説はさておき、本書では文学史の抒情の伝統を見るための新しい路を示し、『詩経』、『楚辞』、漢賦、唐詩、宋词から明清の戯曲、小説に及ぶまで、その深奥に隠れた抒情の伝統の軌跡を探索している。

### 抒情論の近代的意義

王徳威教授による本書巻頭の「導読」では、「抒情」という文学観が近代文学論において見過ごされてきた状況が指摘されている。なぜならば、現今の文学史が掲げる高邁な志に比べると、「抒情」のように自己言及度の高い文学様式は、一九四九年以降の中国文学に与えられた重大な任務を担うことはできないからである。しかし王徳威は「導読」のなかでこのように強調する。

中国文学の流れを振り返れば、『詩経』、『楚辞』以来、抒情は一貫して

文学の想像と実践の重要なテーマの一つであったことがわかる。『楚辞』九章「惜誦」には「惜誦して以て愍を致し、憤りを発して情を抒ぶ」とあり、二〇世紀初めに至ると、魯迅が「文化偏至論」で、「外に向いていたものがしだいに内面に向かい、深思瞑想の傾向がおこり、自省と抒情の心がよみがえった。現実の物質と自然の束縛をはなれ、本来の精神的領域にもどった」と記している。

両者の比喩はかなり異なるが、そうだからこそ、何千年もの間絶えることなく、この抒情という言葉はより力強いものであり続けたのだ。これこそまさに陳国球教授が抒情の伝統を研究する出発点なのである。

つまり、中国文学において抒情の伝統は古より今まで不断に伝承されてきた要素で、歴史上は縦方向の継承であった。さらにそれと同時に、西洋の学問が流入し、西洋文学の伝統との比較対照によつて中国文学の伝統の特殊性がより明らかになり、こうした横方向の比較という視

点は抒情の伝統をより明瞭にしたと言える。陳世驥は次のように述べている。

比較文学の目的は、偉大な伝統間の相違点や類似点、相互作用の部分を探すことにある。生きている伝統は常に動的であり、反応とその反応に対する応答が絶えず生じている。そうしたことが生じるときに気をつけなければいけないのは、これら伝統の間には古代のある時点では根本的な相違がみられたとしても、後世にそれらが交わり類似したものに變化し、あるいは共鳴し、相互に親和性をもつ可能性があるということである。抒情の精神は中国の伝統の中で最も尊い地位にあり、それは西洋における叙事詩や演劇と同じようなものである。

陳世驥の説と、王徳威が提起した『楚辞』から魯迅の言論に至る共鳴と新たな意味の派生という説の趣旨はかなり似ている。どちらも中国と西洋の文学の比較を加えることで中国文学の伝統と近代的視点の考察に論点を見出し、抒情の伝統

の近代的意義を明らかにしている。この意味から陳国球の抒情の伝統の論述を検討すると、彼は文学史という長河の中かばらばらで大量の抒情の言論を整理するだけでなく、さらに抒情の伝統の「情」の内面と外面、および伝統と現代における伝承と変化を明確にすることに、最近の中国文学論の観点である啓蒙や革命との対話を展開しようとしていることがわかる。

古から現在まで「抒情」の定義は多様であり、それは異なるようでもた同じともいえる。本書の最大の特徴は、各派の抒情の伝統に関する論を体系的に取り上げ、中国の抒情の伝統に西洋の視点を用いて古典や近代文学の情志の言説を検討し、さらに抒情の伝統の探索は、心のなかの理想と外の世界とを最も有効な仲介役、すなわち「抒情」の探索であると明言していることである。陳国球は指摘する。

この「抒情の伝統」という概念を打ち出そうとする時、この伝統には「抒情」以外の何物もないと言うのではない。この文化の伝統に「抒

情」という意識が深く浸透しているということを使うのである。この観点から解釈すれば、この豊かな伝統の根底には、ある一貫した力が秘められていることがわかる。<sup>66</sup>

このことは通り、我々は近代および現代文学の中の「抒情の精神」が伝統的詩学の「興と怨」「情と物」「詩と史」などのテーマと密かに呼応していることに気づく。今日の華語文学圏における相容れない二つのイデオロギーに比べて、陳国球が探究する抒情の伝統は、このがんじがらめの状態からの解放をもたらすと期待できる。『詩経』や『楚辞』から受け継がれた言志の抒情は、歴代王朝のさまざまな文学形式による表現を経て、五四白話運動後にはさらに新時代の抒情の意味が賦与された。中国文学史は五四以後新たなページに入り、とりわけ一九三〇年代以後、文学の内側から言えば、文体の解放に加えて西洋の文学論や批評の導入により文学表現が豊かになった。社会の外側から言えば、清末および民国初期からこのかた世の乱れは一向に収まら

ず、その後日中戦争の勃発で文人たちは戦禍の中、故郷を離れ困窮生活を余儀なくされた。これによって近代の抒情作品は国家的な文脈を帯びるようになり、もはや個人の生活の内面的世界に閉ざされたものではなく、外界とつながりを持つようになつた。つまり本書が言うところの「抒情」と「憂思」との同調である。たとえば聞一多の「歌與詩」（一九三九）、「文学的歴史動向」（一九四三）や朱自清の「詩言志説」（一九三七）、「詩言志辨」（一九四七）などの作品がそれである。<sup>67</sup>

陳国球はこの抒情の伝統の「一貫した力」を見出し、先学の陳世驥、高友工の論著からこの抒情の伝統論を体系化しようとした。彼は陳と高の両氏について、方法論としては西洋の近代批評の手法を取り入れているが、内容面では伝統文学の意義を発展させたものだ<sup>68</sup>と指摘する。この研究方法は一九七〇年代から一九八〇年代にかけて台湾、香港の中国文学界の研究者たちに大きな影響を与えた。たとえば蔡英俊、呂正惠、柯慶明、張淑

香、蕭馳などである。ただし、大きな影響を受けたこの世代の研究者とは別に、この抒情の伝統論の発酵はまたさまざまな論も生み出した。例えば龔鵬程は最近の抒情の伝統という觀念に対して疑問を呈し、後に鄭毓瑜が発表した『詩大序』的詮釈界域——「抒情伝統」與類心世界觀（二〇〇三）は、抒情の伝統論を「個人」の感情表現という小さな領域から「知識構造」の共有という「公共」領域へと転換させた。陳国球は華人研究者以外にも、アメリカの中国学者ステファン・オーウェン（Stephen Owen）、チェコの学者ヤロスラフ・プルシエク（Jaroslav Průšek）の説を含む、非中国系の中国研究者の説にも注目する。彼は自らこう述べる。「抒情の伝統」を論ずることは、中国文学研究者が「現代の状況」下で研究対象の文化的所屬とその意義を再考することでもある」と。抒情の伝統をめぐる言説がより広い範圍に目を向け、現実の闇に光を当てることができたのも、この「現代的」な視点があつたからこそである。

### 各家の説——抒情の言説の波及効果

前文で触れた本書に取り上げられた中国および外国の研究者による抒情の伝統についての言説は、それぞれ研究者独自の見解であるが、互いに影響することも対話することもあり得、しかもそれらが属する「現在」の状況においてその効果を發揮する。「抒情」は個人の人生経験の表われであるが、同時に公共的な意味をもつ社会的なものである。王徳威が「導読」の副題を「史識與抒情」としたように、本書は中国文学史の抒情の伝統を論じるうえでこの点にも関心を示している。

本書は全十章からなり、陳世驥、高友工の抒情の伝統論と抒情の美意識の構築、林庚の「詩国文学史」、胡蘭成の神道文学觀、プルシエクの中国文学中の「抒情の精神」および中国の詩歌論について論じられている。その中でも特に一章を割いてプルシエクと夏志清の二人の文学史論争について論じ、最終章で香港に南下した文人司馬長風の新文学史の

考察へと戻る。この章節の構成には陳国球の意図と彼の「抒情」への思いが表われている。前述したように、本書の抒情の伝統論は彼が台湾に移つて以降に出版した著作である。この著作で取り上げた林庚を除く学者、詩人、文人たちの生活拠点はいずれも大陸にはない。彼らには中国経験はあるが、一九四九年以降この経験は時間の経過とともに風化して記憶となり、中国大陸で彼らの論が學術潮流を引き起こすことはなかつたが、台湾、香港等の中国語圏の学界には大きな影響を与えた。一九四九年以後の中国大陸では、文学史の論述や出版において海外の中国語地域とは全く異なる方向に進み、写実性や社会主義イデオロギーを強調するあまり、中国本土の文学史の記述には、より強い統制機能が見られるようになった。一方、台湾、香港の文学史では海外文学批評の養分を吸収し、文学の史的变化や文学性の保持がより重視された。前世紀に明確に分断されてしまった中国語圏にとつて、本書で取り上げられたさまざまな研究者は、中国文学史にお

ける抒情の言説を効果的に確立したと言える。この抒情の伝統論は、文学史の伝統について考える道筋を提供しただけではない。なかなか為しがたいことだが、陳国球は反対する学者（例えば、龔鵬程や黄錦樹）の論にも言及し、本書の議論をより立体的で包括的なものにしていく。陳国球は本書の中で自己の抒情伝統論に対する考察と見直しについて述べており、「現代」を基礎にして、方向性の異なる「抒情」の論と、また異色の文学史を並置して参照するというやり方を探り、読者に向かって、「本書各章の論によって「中国文学」に対する確たる「唯一」の真相を必ずしも得られるわけではないが、文学とその文化領域は「情」と「文」が流れ注ぐことによって照り映え、その間にさまざまな現象が浮かび上がる、文学研究の面白さと知の萌芽はここにあるのかもしれない」ことを伝えようとしている。このように本書で作者自身が述べるように、文学では「情」と「文」は不可分であるが、それはまた流動的概念でもある。文化領域の相違に

よって異なる視野と関心がうまれるのであり、まさにこの抒情の言説の変化と変動こそが文学研究を面白いものにする。彼は文学が衰退している今こそ特に意義があることを伝えようとしている。

本書はまず序文で「抒情」の伝統について一通り述べ、中国文学の「抒情の伝統」とは何かについて検討し、本書を貫く軸である「比較の視点」について提起する。陳国球は指摘する。

詩歌、小説、演劇といった新しいジャンルを組み込んで、その総称として「文学」を用いることは、近代的な概念と言える。この「近代」という視野の下でこそ「西洋」と並置された「中国」の意味がうまれる。したがって「中国」の「文学の伝統」は、「西洋の文学の伝統」との対照によってこそ認識され、あるいは「構築」されると言えるのだ。

本書は比較文学の視点で、伝統文学と近現代文学および東洋西洋の文学を比較対照することによって抒情論を展開し、その文化的意義を探ろうとする。中国文

学の中で最も繊細にして長く続くこの表現が現代にどのように作用し、どれほどのエネルギーが注入されているのか。これが陳国球の本書における最大の問いかけである。このため彼はまず、一九四九年以降消えてしまった「言志」「抒情」論を継承するために、「抒情の伝統」の提唱者である陳世驥と、この論を充実させた高友工の説を取り上げる。陳世驥についての検討で陳国球は、古典から近代に至る「抒情の伝統論」の起源と変遷に着目するだけでなく、この「抒情伝統論」の起源と形成を学者自身の人生と学問の道に立ち返って探究し、時代の大きな変化を経験した一人の華僑の学者の学術的思考を通して中国文学研究の文化政治を理解しようとする。それはまた研究者が今日直面する難しい学問的な岐路でどう歩むべきかという省察でもある。陳世驥は一九七一年の「亜洲研究学会」で「中国的抒情伝統」という文を発表し、中国文学の伝統は全体から見れば抒情の伝統であり、しかもこの東方的抒情の伝統をヨーロッパの叙事詩や演劇の伝

統と並べてみると、よりその特色が際立つことを明確に指摘した<sup>14)</sup>。陳世驥はその前の一九五八年には台湾大学の一連の講演の中でこの説に言及しており、それは台湾の中国文学の学界で反響を呼び、後進の研究者に大きな影響を与えた。陳国球は陳世驥の抒情の伝統論を論じるにあたり、特に彼の生きた時代背景に注目した。大変動の時代を生きた学者が学問を修めた過程を遡り、陳世驥が近代文学から古典文学研究に転向した動機を探った。また一九四八年に翻訳した陸機の「文賦」への思い入れでは、文学を暗闇に対抗する光として、西晋の乱世と自身の乱世での感情を対比させ、自分自身の一筋の希望の光としたという。この陳国球の論著によって陳世驥が論じたことは今もなお癒しの効果を發揮し、文学は現代の我々に一縷の安らかな慰めを与えてくれるのだ。

西洋で言語分析と形式主義を修めた高友工の「抒情の美意識」について言えば、この高度に美的な文化美学パラダイムは、抒情の視野を中国文明全体にまで

広げたことで、台湾の外国文学界または中国文学界に大きな影響を与え、一九八〇年代以後の台湾の抒情の伝統論を主導した。陳国球は高友工の抒情の美意識を分析する際、同時に彼の学問的思考の歴史も追究し、これを高友工の美学理論と照合させた。陳国球の指摘によると、高友工は謹厳なる文学論の中で、「人文研究」の目的は、「客観的事実や真実」を追求するだけではなく、「客観現象における自己存在の可能性を想像すること」と説明しているという。それは「価値」の追求であり、境界を示すことでもある。陳国球の高友工論の中に興味深い記述がある。それは高友工の美学パラダイム構築の戦友である梅祖麟の離脱である。本書では梅祖麟について、彼が一九七五〜一九七六年に日本で学んだ折、日本の中国文学研究の大家吉川幸次郎と小川環樹を訪問し、この二名の大家に高友工との共著の唐詩を論じた二篇の文章を献呈したが、一顧だにされなかったことを述べている<sup>15)</sup>。ここから明らかなことは、欧米の漢学界と日本の漢学界の間の

学問の相違である。実証研究を重視する日本の漢学界では、古典であれ近現代であれ、研究者はみな中国文学の研究では一字一句の逐字鑽研を重視する。それは木を見て森を見ずと言える。一方で、欧米の学界は理論を尊び、全体的な構造の方法論を重視するため、森を見て木を見ずの感がある。両者間の異なる研究態度はそれぞれ異なる成果となって表われる。まさに陳国球の本書の出版は、日々変化する日本の中国文学研究者たちに新しい考え方を提供するものだ。なぜなら本書は西洋的な文学論の分析であると同時に、研究者の知的歴史の探究を合わせたもので、二つの伝統の融合だと言えるからである。

陳国球は本書の中でチェコスロバキアの中国学者プルシエクの文学論にも言及し、この中国経験があり、左翼革命を称賛し、文学理論にも精通した研究者について探索している。プルシエクは、中国の新旧文学の伝統に深く根ざした「抒情の精神」に魅了され、この抒情こそが中国の近代革命を起こした最大の原動力で

あると考えた。この論を強く主張したことで、後に夏志清との間で政治イデオロギーと方法論の違いをめぐって文学論争を繰り広げることになった。そのほか、陳国球は何人かの近代文学史の執筆者を取り上げる。林庚、胡蘭成、司馬長風などである。この三名が著した近代文学史は、いまの中国からすると時宜に合っていない著作と言えるが、この三つの著作を見れば、彼らが抒情の伝統を巧みに受け継いでいることは明らかである。京派の晩期の詩人の一人である林庚が一九四七年に出版した『中国文学史』は、書かれた内容にも篇章のタイトルのつけ方にも、戦火の時期の詩人の敏感な心霊と詩性があらわれている。胡蘭成が一九七七年に出版した『中国文学史話』を、陳国球は「文学のみそぎ」と解釈する。胡蘭成思想には日本の神道の美学が混入しており、陳国球は胡の文章に特殊な美学観と情の論理を感じ取り、その文学観の中国近現代文学に対する影響を指摘し、さらに胡の文章の魅惑的な力の由来と文学論について指摘している。本書は最後

に司馬長風および彼が一九七三〜一九七八年に撰じた『中国新文学史』三冊を取り上げる。司馬長風の文学史を冷戦末期の植民地香港で世に問うたこと自体には次のような意義があると陳国球は考える。

学術的目標を追求しながら、回想録のような遺漏がある。青春の恋歌のようなノスタルジーがありながら、ナシヨナリズムへの傾倒もある。文学至上の「非政治」論でありながら、明らかに政治的志向もある。<sup>(14)</sup>

司馬長風は中国から植民地香港に南下し定住した文人として、「純粹な」白話での執筆に対して強い郷愁を込めており、彼が「非政治」的なユートピアを思いながら書きあげた『中国新文学史』は、一つの抒情文学史を成している。

抒情の伝統の道をたどる陳国球の路は、越境の旅であり、同時に自分自身の考えを文中に託す作業でもあり、この抒情の伝統の経緯を探究する苦労は並大抵ではない。本書は中国文学と世界文学との対話を展開させる可能性をもち、さらに中国文学の抒情伝統の特殊性を明らか

にしている。そして現代文学の中に存在する抒情意識を重視するよう読者に注意を促している。彼が本書の中で幾度となく強調する「文学を暗闇の光とする」の深意も読者に伝わるだろう。そして我々は彼が本書で取り上げた対象は互いに共感しあう可能性があること、細やかな感性の中国文学の伝統では抒情によって自分の思いを伝えてきたのだということとを再認識し、作者陳国球に続いてこの抒情の伝統の路に文学の光を追求し始めるであろう。

## 注

- (1) 陳国球『抒情伝統論與中国文学史』(台北：時報文化出版、二〇二一年、四九一〜五一頁)を参照のこと。
- (2) 主な著作に『唐詩的傳承——明代復古詩論研究』(台北：学生書局出版、一九九〇年)、『香港地区中国文学批評研究』(台北：学生書局出版、一九九一年)、『中国文学史的省思』(台北：書林出版、一九九四年)、陳国球・王宏志・陳清僑編『書写文学的過去——文学史的思考』(台北：麦田出版、一九九七年)、

- 『感傷的旅程——在香港讀文學』（台北・學生書局、二〇〇三年）、『文學如何成為知識？——文學批評、文學研究與文學教育』（香港教育學位院講座教授公開講座系列、二〇一〇年）、『結構中國文學傳統』（武漢・華中師範大學出版社、二〇一一年）、『抒情中國論』（香港・三聯書店出版、二〇一三年）、『文學如何成為知識？——文學批評、文學研究與文學教育』（北京・三聯書店出版、二〇一三年）、『王夢鷗教授學術講座演講集 二〇一二——「文」與「學」三題』（台北・國立政治大學中國文學系、二〇一四年）、『香港的抒情史』（香港中文大學出版、二〇一六年）、『香港・文學——影與響』（台北・練習文化實驗室有限公司出版、二〇一七年）、主編『重遇文學香港』（香港・商務印書局、二〇一八年）などがある。
- 〈3〉 詳しくは戴燕著『文學史的權力』（北京・北京大學出版社、二〇〇二年）を参照されたい。
- 〈4〉 該書六頁。なお魯迅の「文化偏至論」の日本語訳は伊藤虎丸訳『魯迅全集』一、学習研究社、一九八四年に拠った。
- 〈5〉 陳国球は該書に陳世驥が一九七〇年代に楊彥妮と共訳した「中国抒情伝統論述」を付録として収載している。該書九三―九四頁。
- 〈6〉 該書四二頁。
- 〈7〉 抒情伝統の現代性（モダンティイ）の議論については、王徳威『現代抒情伝統四論』（台北・台大出版中心、二〇一一年）を参照。
- 〈8〉 該書四二―四六頁。
- 〈9〉 該書五〇―五一頁。
- 〈10〉 該書一八頁。
- 〈11〉 該書五四頁。
- 〈12〉 該書九〇―九一頁。
- 〈13〉 該書一九〇頁。
- 〈14〉 該書三九八頁。